

源氏物語における複合動詞「思ひ知る」の意味用法

岡野幸夫

一、はじめに

本稿は、「源氏物語」における「思ひ知る」の意味用法を明らかにすることを目的とする。これにより、「源氏物語」の複合動詞語彙の構造および平安時代和文における複合動詞の意味構造を説明する一階梯としたい^(註1)。

『平安時代複合動詞索引』(文献^(註2))によれば、「源氏物語」には異なり語数で総計三、七五三語の複合動詞がある^(註3)が、そのうち「思ふ」を前項にもつ複合動詞は一九五語あり、全体の約五・二%を占める。また、「思ふ」を構成要素にもつ複合動詞は四六一語あり、これは、構成する複合動詞の数としては第一位の「打つ」(六二二語)に次いで第二位である^(註4)。このように、数量的見地のみからでも、「思ふ」を前項にもつ複合動詞が、複合動詞語彙の研究上、無視できない存在であることが分かる。

本稿で考察の対象とする「思ひ知る」は、知覚作用という、一種の心理動作を表す「知る」に、代表的な心理動詞である「思ふ」が上接するという、一見冗長さを感じさせる語構成であるが、いかなる意味用法なのであろうか。

以下、右の問題意識をふまえて、「思ひ知る」の意味用法を検討する。その際、意味や前後の文脈、共起する語句といった観点から、「思ふ」が上接しない、単独の「知る」と比較する^(註5)。

二、先学の研究

稿末に、本稿での考察に関連する先学の研究を①〜⑨として一覧した。これらから、「思ふ」を前項にもつ複合動詞や「思ひ知る」の意味用法、構成要素間の意味関係について述べられた部分を整理する。

佐久間博子氏は①で、「思ふ」を前項にもつ複合動詞について、「思ふ」がもとも持っている意味と、結合した動詞の意味の共通のものが、強調されるのである。^(註6)とあり、多義の「思ふ」が表しうる文脈の意味を分析的に複合動詞として表現することがある、と指摘する。また、「前述の「分類語彙表」で、「精神」の項に入る動詞と、「思ふ」が結合している場合は、「思ふ」単独の用法では表わせない意味を、これらの動詞と結合することにより「思ふ」に与えている。言いかえれば、「思ふ」を結合している動詞の意味の方に傾かせている場合があるといえないだろうか^(註7)と指摘する。いずれの場合も、結合する動詞に対して「思ふ」が意味の主要部分を担うような意味関係になる、という主張のようである。これは、前項の「思ふ」を中心に複合動詞が構成されている、という考えで、②以降とは異なりユニークな論である。

中村幸弘氏は②で、「万葉集」に見られる「思ふ」を前項にもつ複合動詞をいくつかの群に分類し、そのうちの「思ひ+心的動作動詞」型について、「思ひ」型複合動詞と、「思ひ」が付かない単独動詞との違いは、「意味上の異同ではなく、度合ひ、深さの面での差を見るべき問題かに思はれる」^(註8)と述べ、「思ひ」が付くことにより、心理的意味に心理的意味が加算され、後項たる心的動作動詞の意味が強調されると述べている。これは①の前半部分と同様の主張であるが、①では前項の「思ひ」に意味の重点があると考えるのに対し、②は後項動詞に意味の重点があると考えているようである。

竹村佳代子氏は③で、「おほしいそぐ」と「いそぐ」の違いについて、「おほしいそぐ」には、思い悩む心と強い意志がある^(註9)のに対し、「いそぐ」は早くしようと思ふ心の動きと共に、その後当然現われるところの行為をも含んで表わしている語である^(註10)と述べ、「おぼす」が付くことによって心理的意味を表すこと、そして「いそぐ」は心理だけでなく具体的な行為をも表すことを主張している。

関一雄氏は④で、中古から近世の複合動詞語彙を統計的に概観し、他動詞同士、自動詞同士の組合せが大半を占めることから、複合動詞の構成要素間の意味関係の基調は、時代を通じて一致関係（構成要素が対等に複合して、新たな意味を生じているもの）であったと述べる（二〇九頁）。その際、「思ふ」を含むものは「思ふ」の自他の判別が困難であるため、別扱いにしている（二〇六頁）。また⑧では、「平安仮名文学の中で、散文―物語・日記・随筆類に用いられている動詞語彙は、基本的に、動作主体、すなわち登場人物の動き（演技）を表す用語であった。つまり、目に映り、耳に聞こえるような動作を表す動詞（「具体動作語動詞」と仮称）が核となり、心の動きを表す動詞（「心理動作語動詞」と仮称）が補完的役割を果たした」（七二―七三頁）と述べ、「平安の仮名物語用語としての単独動詞は、基本的に具体動作語であり、心理動作は、それに「おもひ」を上接することによって造語されたと考える」（七五頁）とも述べる。この考えは⑨にも継承されている。

安光裕子氏は⑤で、「思ふ」を前項にもつ複合動詞の構成要素間の意味関係について分類整理し、「単独「思ふ」や単独「思」よりも、それらが結合してできた「思ひ^二」の方が、意味は更に強調され、広がり、又更に詳しく限定され、複雑な観念を表わしている」（二四四頁）と述べる。また、「単独「思ふ」は十分独立しているとはいえ、他の多くの動詞と結合することによって、それだけでは十分表現し得なかった部分を補っている」（二五頁）とも述べる。

竹内美智子氏は⑥で、「おぼし疑ふ」「おもひ疑ふ」が「源氏物語」においてきわめて重要な箇所でのみ用いられていることを指摘し、「前項の「思ひ」は「疑ふ」ことすなわち不信の念が、心の奥底に、じつと滲えられて、ぬぐい去り難いものであることを表わし、後項の「疑ふ」に深い陰影を添える役割を果たしている」（二七五頁）と述べる。さらに、「源氏物語の「思ひ」には、閉ざされた心の世界を描くためのものが極めて多いのである」（二七五頁）とも述べ、文学的考察にまで及ぶ。

山田みどり氏は⑦で、「思ふ」を前項にもつ複合動詞の構成要素間の意味関係を分類し、「思ひ知る」はその中の「2」、「思ひ」の主体が同時に下の動詞の主体でもあるもの（「思ひ」が下の動詞を連用修飾している）」の「A、下の動詞の行為」と「思ふ」行為とが同時に行われるもの」のd（「しかと」認識してゝする」）に分類されている（九頁）。

以上、先学の研究について概観した。まとめると、①を除けば、表現はさまざまであるが、「思ふ」が付くことによって、後項動詞の意味が心理的な動作になること、前項の「思ふ」は後項に対して連用修飾の関係になること、が明らかにされているといえよう。次節では、これらをふまえて、さらに詳細に検討する。

三、「思ひ知る」の意味用法

三・一 概観

「源氏物語」には、一三一例の「思ひ知る」が見られ、「思ふ」が付かない単独の「知る」は五二九例見られる（註五）。

「思ひ知る」の用例から顕著に見てとれる傾向として、自発の助動詞「る」が下接するものが非常に多いことがあげられる。全一三二例のうち四六例（三五・一％）が該当する。単独「知る」の場合は全五二九例のうち一〇例（一・九％）であり、明らかな傾向として認められる。

①院にも、かゝることなむときこしめして、「略」など御けしきあしければ、わが御こゝちにもげにとおもひしらるれば、かしこまりてさぶらひ給（葵 291）

用例①は、光源氏と六条御息所との関係を耳にした桐壺院が、光源氏を諫める場面である。諫められた光源氏は「おのずから反省する」のである。このことは、「思ひ知る」が「意図的でなく、自然にそうなる」こととして表現されることが多い、ということを表し、助動詞「る」と「思ひ知る」の意味との親和性がうか

がえる。この点については後述する。

「思ひ知る」の構成要素間に接続助詞「て」「つつ」が介在する用例は「源氏物語」には存在しない。謙譲語「給ふ下段」が介在する例は一六例見られ、係助詞「こそ」「も」が介在する例は一例ずつ見られる後述。

②「いのちながさいとつらう思ふたまへしらるゝに、まつと思はんことだにはづかしうおもふたまへ侍れば、もゝしきに行かひ侍らんことはましていとはづかりおほくなむ。(略)とのたまふ。(桐壺12⑫)

用例②は、桐壺帝からの手紙を読んだ桐壺女御の母が、使者である鞍負命婦に話す場面である。「莊子」を引き合いに出し、長生きのつらさが思い知られた、というのである。この例に限らず「思ひ給へ知る」の謙譲語「給ふ下段」は、構成要素の間に介在しているが、意味的には前項「思ふ」だけを謙譲語にしているとは考えられず、「思ひ知る」全体を謙譲語にするよう機能している。このように、謙譲語「給ふ下段」が介在する例が相当数用いられていることは、尊敬語の語形である「思し知る」「思ほし知る」に対応するもので、「思ひ知る」がさまざまな人間関係において用いられたことが反映していると思われる。

③「山里の秋の夜ふかきあはれをももの思ふ人は思こそ知れをのづから御心もかよひぬべきを」などあれば、「あま君おはせて、まぎらはしきこゆべき人も侍らず。いとよつかぬやうならむ」とせむれば、
憂物と思もしらで すぐす身を物おもふ人とひとはしりけり
わざといらへともなきを、きつてつたへきこゆれば、…(手習358⑩⑬)

用例③は、小野の山里で暮らす浮舟を訪問した中将が詠みかけた和歌を聞いた浮舟が、返事のつもりでもなく和歌を詠む場面である。介在する係助詞は、係り結びや否定表現と呼応しつつ、前項「思ふ」のみならず、「思ひ知る」全体を強調しているとの解釈ができる後述。なお、点線部に単独「知る」が見られるが、これは傍線部「思もしらで」と対応しており、「思ひ知る」の意味を考える上で重要である。

この点についても後述する。

また、文献⑩によると、構成要素の順序が入れ替わった「知り思ふ」「知り思す」「知り思ほす」は平安時代の仮名文献には用いられていない後述。

以上、構成要素間に謙譲語「給ふ下段」や係助詞「こそ」「も」が介在する事実、および構成要素の結合順が固定しているという事実から、「思ひ知る」が二語の連続ではなく、一語の複合動詞である、ということが分かる。

三・二 目的語

「思ひ知る」「知る」とともに、さまざまな目的語をとる。どのような目的語をとるか、便宜上、二例ないし三例以上見られるものを以下に一覧する。

思ひ知る(二例以上)		知る(三例以上)	
もの	18	「心」系 <small>後述</small>	63
世・世の中	12	あはれ・ものあはれ	15
心の程・心ばへ・心ざし・ものの心	8	「世」系 <small>後述</small>	13
なにごと	6	程・ものの程	8
身・身の程・身の有様	5	ことわり	5
あはれ	4	身・身の上・身の程	5
ちぎり	3	命・命の程	4
よろづ	2	ちぎり	3

右の表を見ると、両者に共通する目的語が多いが、「思ひ知る」に特徴的な語句として、「もの」「なにごと」「よろづ」といった、抽象的で漠然としたものが見られる。反対に、「知る」には「ことわり」といった、論理的な語句が見られる。

④あまぎみ、かみをかきなでつゝ、「略」。かばかりになれば、いとくゝらぬ人もあるものを。こ姫君は十ばかりにて殿にをくれ給ひしほど、いみじうもの

はおもひしり給へりしぞかし。(略)とていみじくなくをみ給も、すぐるにかなし。(若紫159①)

⑤「いますし物をも思ひしり給ほどまでみすぐさんとこそは、としごろねんじつるをふかきほいもとげずなりぬべき心ちのするに思もよをされてなん。

(略)「と、よろづにおほしわづらひたり。(若葉上219⑤)

これらは「もの」の例である。用例④は、尼君が亡くなった母親を引き合いに出して若紫を諫める場面、用例⑤は、朱雀院が女三宮のことを心配して婿の候補を批評する場面である。いずれも「もの」の道理が分かる、判断力を持つ」といった意味である。

⑥むかしはなに事もふかくもおもひしりで、なかく、さしあたりていとをしかりしこのさはぎにも、おもなくてみえたてまつりけるよ、といまぞ、おもひいづるにむねふたがりて、いみじくはづかしき。(常夏17①)

⑦「いとたづきもしらぬ心ちしつるに、うれしき御けはひにこそ。なにことも、げにおもひしり給けるたのみ、こよなかりけり」とて、よりみ給へるを、(橋

姫318⑦)

これらは「なにごと」の例である。用例⑥は、父内大臣に諫められた雲居雁の心中、用例⑦は、宇治の姫君の冷たい応接に困っていた薫が、弁の対応に感謝する場面である。これらも「もの」の道理が分かる、判断力を持つ」といった意味である。

⑧あひなくもの給かな、とおぼせど、「としごろによろづおもふ給へしりにたるものを、むかしのすき心の名残ありがほにの給ひなすもほいなくなむ。よし、をのづから」とて、(濤標119⑩)

用例⑧は「よろづ」の例である。死に瀕した六条御息所から娘を託された光源氏が返答する場面である。今は万事心得ているのに、そうではないように言われて不本意だ、というのである。

⑨れいぜん院のきさいの宮よりも、あはれなる御せうそこたえず、つきせぬことらもきこえ給ひて、

かれはつるのべをうしとや、なき人の秋に心をとらめざりけん
いまなんことほりしられ侍ぬる。

とありけるを、ものおぼえぬ御心にも、うちかへし、をきがたくみ給ふ。(御

法179⑥)

⑩やうくことほりしり給にたれど、人の御うへにても物をいみじく思しづみ給て、いとどかゝるかたをつきものに思はて、(総角430⑤)

これらは「ことわり」の例である。用例⑨は、紫上の死後、秋好中宮が光源氏に手紙を送る場面で、紫上が秋ではなく春を好きだとしたことの理路が今分かった、というのである。用例⑩は、匂宮と中君の結婚後、大君が薫と対面する場面で、大君が自分たち姉妹の収まるべき行く末は理解したものの…というのである。

以上、いくつかの用例を見たが、「知る」に論理的な目的語が見られる一方で、「思ひ知る」に抽象的な目的語が見られることは、両者の差異を考える上で注目すべきことである。すなわち、「知る」は直接的な知覚作用を表す動詞であるのに対し、「思ひ知る」は思考のプロセスを経たうえでの知覚作用を表す複合動詞である、といえるのではないか。このことを、共通する目的語のうち、両者に比較的用例の多い「世」系の目的語をとる用例で検討する。

⑪ねられたまはぬまゝには、「我はかく人にくまれてもならはぬを、こよひなむはじめてうしとよをおもひしりぬれば、はづかしくてながらふまじうこそおもひなりぬれ」などのたまへば、(空蟬84②)

⑫宮、「よのなかをかりそめのことゝおもひとり、いとほしき心のつきそむる事も、わが身にうれへあるとき、なべての世もうらめしう思ひしるはじめありてなん、道心もおこるわざなめるを、(略)」などのたまひて、(橋姫308⑬)

⑬もとよりづしやかなる所はおはせざりし人の、としごろは、さまへに世中

を思しり、きしかたをくやしく、おほやけたくしの事にふれつゝ、かずもなくおほしあつめて、いといたくすぐし給にたれど、(若菜上 253 ⑨)

(11) 人のけはひ、いとあさましくやはらかにおほほきて、ものふかくをもきかたはをくれて、ひたふるにわかびたるものからよをまだしらぬにもあらず、いとやむことなきにはあるまし、いづくにいとかうしもとまる心ぞ、とかへすくおほす。(夕顔 113 ⑭)

(12) 「略」あやまちもおほせぬ身を、いとつゝましげにおもほしわびためるも、いさゝかにても世をしり給へる人こそあれ、いかでかはと、ことはりにいとおしくみたてまつる」として、ひきおこしてまいらせたてまつる。(東屋 162 ⑮)

(13) すこしよのながをもしり給へるけにや、さばかりあさましくわりなしとはおもひ給へりつるものから、ひたふるにいぶせくなどはあらず、いとらうくじくはづかしげなるけしきもそひて、さすがになつかしくいひこしらへなどして、いだし給へる程の心ばへなどを思ひ出るも、(宿木 69 ⑯)

用例⑩は、空蟬に拒絶された光源氏が、小君を責める場面、用例⑫は、宇治の八宮が阿闍梨に語る場面、用例⑬は、朱雀院の出家後、光源氏の訪問を受けた朧月夜の様子である。用例(11)は、夕顔のことが気にかかる光源氏の心中、用例(12)は、浮舟の乳母が、匂宮に言い寄られた浮舟を中君の御前に連れて行き陳情する場面、用例(13)は、中君に迫った薫が、翌朝になって昨夜の様子を思い出す場面である。

用例⑩～⑬の波線部にあるように、「思ひ知る」の場合は思考の結果や内容が語句として表現される例が多い。一方、単独「知る」の場合はそうした語句は現れない。「思ひ知る」が「あれこれ考えたことをふまえ、これこれだと理解する」という意味を表しているのに対し、単独「知る」は、端的に「理解する」という意味を表しており、両者には「思ふ」の有無に対応した意味の相違が認められる。

前述の用例⑩で、「思ひ知る」は自発の助動詞が下接する用例が多く、「意図的でなく、自然にそうなる」こととして表現されることが多いことを指摘したが、

これも思考のプロセスを経ることと関係がある。つまり、「あれこれ考えると、自然とこれこれの結論に至る」というつながりなのである。

三・三 話し手と聞き手の人間関係

この項では、会話・手紙・和歌といった、話し手(送り手を含む)と聞き手(受け手を含む)の人間関係について検討する。とくに、身分などの上下関係に注目する。上位・下位の判断は、登場人物の身分差が明らかであればそれにしたがうが、微差の場合は、前後の場面で用いられる作者による待遇表現によって判断する。それでも差がはっきりしない場合は上下関係の判断を保留する。

「思ひ知る」「思し知る」「思ほし知る」と単独「知る」の全例について、上下関係について確認したところ、いずれにおいても、下位者から上位者に対して直接用いる用例はほとんど見られなかった。(表 11)

また、目前の相手に直接用いる用例(手紙で語りかける場合も含む)の数を比較すると、単独「知る」は全五二九例中三〇例(五・七%)であるのに対し、「思ひ知る」は全一三二例中九例(六・九%)、「思し知る」は全八四例中二例(二・六・二%)、「思ほし知る」は全五例中二例(四〇・〇%)である。「思ひ知る」「思し知る」「思ほし知る」を総計すると全三二〇例中三三例(二五・〇%)となり、単独「知る」よりかなり高い率で目前の相手に直接用いられている。

これらの、下位者から上位者へ直接用いることがほとんどないことや、「思ふ」「思す」「思ほす」が付くと目前の相手に直接用いやすくなる、ということがらは、何を表すのであるのか。本稿の筆者は、「源氏物語」成立当時、単独「知る」は、目前の相手に直接用いると、相手の知覚作用を直接述べることになり、いささかぶしつけない感じになっていたのではないかと考える。これに対して「思ひ知る」は、思考のプロセスを経たうえで知覚作用という意味を表すがゆえに、直接性が和らげられ、単独「知る」より婉曲でソフトな表現になったのだと考える。

⑭「なをかうおほししらぬ御ありさまこそかへりてはあさう御心のほどしらる

れ。(略)世中をむげにおぼししらぬにしもあらじを」と、よろづにきこえせめられ給て、いかゞいふべき、とわびしうおぼしめぐらす。世をしりたるかたの心やすきやうに、おりくほのめかすもめざましう、げにたぐひなきみのうさなりや、とおぼしつゞけ給に、しめべくおぼえ給うて、(夕霧98⑬)

この用例は、柏木の死後、言い寄ってくる夕霧のセリフに不快感を覚える落葉宮の心中を描いた場面である。夕霧が落葉宮に「世中を」思し知る」を使ったのを受けて、落葉宮は自分が「世を」知る」と言われた、というふうには、視点の違いに応じて使い分けられている。

前述の用例③においても、「思ひ知る」と単独「知る」が対比的に用いられているが、これも同様に、立場の違いに応じて使い分けであると考えられる。

三・四 構成要素間の意味関係

複合動詞の構成要素間の意味関係としては、文献④に「一、補助関係、二、修飾関係、三、一致関係」(八七頁)の三種類が考えられている。「補助関係」は後項が前項を意味的に補助する関係、「修飾関係」は前項が後項を意味的に補助する関係、「一致関係」は前項と後項が意味的には対等で、新たな意味を生じている関係を指す。本稿では、これに「並立関係」を加えて考えたい。これは、前項と後項が意味的に対等で、新たな意味を生じていない関係である。狭義の複合動詞とは呼べないが、本稿で「並立関係」までも広義の複合動詞に含めるのは、意味的に二語の連続であっても、文法的には一語として用いられたことや、それが一回的な臨時の語形であっても、そのような「動き」として表現されたことを重視したいからである。複合動詞語彙の実態や史の変遷を広くとらえて研究する立場からすれば、そのようなものも含めた方がより深く検討できると考える(註二二)。

さて、「思ひ知る」が一語の複合動詞であることは三・一で述べたが、構成要素間の意味関係は「補助・修飾・一致・並立」のいずれの関係にあてはまるであろうか。まず、辞書の記述を確認する。用例等は略し、語義のみ引用する。

○北山谿太著『源氏物語辞典』(平凡社・一九五七)

思ひ知る…「心にわかまへ知る。心にさとる。解す。」

思し知る・思ほし知る…「思ひ知るの敬語。」

知る…「①さとる。理解す。心得。わかまふ。見わく。みとむ。②考慮す。意

とす。③経験す。④交はり親しむ。男女の交りをなす。⑤かかはる。関係

す。かまふ。世話す。⑥治む。支配す。領す。つかさどる。」(註二二)

○中田祝夫編『古語大辞典』(小学館・一九八二)

思ひ知る…「物の道理や趣などをわかまへ知る。理解する。また、身にしみ

て感じる。」

思し知る・思ほし知る…項目なし。

※「思す」の「語誌」に、「連用形「おぼし」は、他の心的動作を表す動詞に上接

し尊敬の意を加える。これを接頭語とする説もある。」とあり、参考文献として

文献⑬⑭を挙げる(森昇一氏執筆)。

知る…【自動詞】わかる。【他動詞】①わかる。理解する。②意識する。感じる。

③認める。見分ける。④経験する。見聞したことがある。⑤親しくつきあ

う。⑥男女の交際をする。⑦関係する。責任を持つ。

○『日本国語大辞典』第二版(小学館・二〇〇一)

思ひ知る…「物事の道理や趣などをわかまへ知る。なるほどと思ひ当てる。理

解する。痛感する。悟る。」

思し知る…「(おもいしる(思知)の尊敬語)物事の道理や趣などを理解なき

る。なるほどとお思いになる。」

思ほし知る…「(おもいしる(思知)の尊敬語)事の深いわけや趣をおわかま

えになる。心におさとりになる。理解なざる。おぼししる。」

※「思す」の第四の意味として「多く、知覚的動作を表す動詞の上に付けて

その動作主への尊敬の意を加える。」「おぼしあがむ」「おぼしいらる」「おぼしう

たがふ」「おぼしめる」「おぼしなげく」「おぼしみる」「おぼしよる」「おぼしわたる」「おぼしわざ」など。」とあり。

知る…【自動詞】物事の性質、なりゆき、対処すべき方法などがわかる。【他動

詞】物事をすっかり自分のものにする意。日(知)①物事の発生、存在、

状態、内容、働きなどをわかまえる。④物事の発生や存在を認める。意識

する。認識する。感知する。⑤物事の状態、なりゆき、他との区別、対処

すべき方法などをわかまえる。⑥物事の意味、内容、情趣、本質などを理

解する。さぐる。③打消の語を伴って、「…することができない」の意に用

いる。②考えに入れる。考慮する。③実際に行なってみたり、見聞したり

する。経験する。↓男を知る・女を知る。④人と交わり親しむ。面識があ

る。⑤関知する。かわりあう。下に打消の語を伴って、相手のことばに

対して「拒絶する、問題にしない」という気持ちを表わす場合が多い。

いずれも、第二節で検討した先学の研究と軌を一にする説明であると考えてよ

さうである。つまり、「思ひ知る」の前項「思ひ」は、後項「知る」が心理的に

行われることを連用修飾的に表し、心理動作「知る」の意味が、同じく心理動作「思

ひ」によって強調される、という説明である。それは、『古語大辞典』の「身に

みて感じる」や『日本国語大辞典』の「痛感する」といった語釈に現れている。

また、「思す」に関して、点線部のような説明も見られる。しかし、この考え方

は、「思ひ知る」「思し知る」「思ほし知る」の語釈と相容れないのではないか。し

かも、例えば「思ひ知る」と「思し知る」とでは複合動詞としての意味構造がま

ったく異なることになるわけで、「思ふ」「思す」「思ほす」「思ひ給ふ」^{〔上巻〕}を

含む複合動詞語彙の体系性に対し、整合を欠く説明に見える。

本稿の筆者は、三・一〜三・三の検討を総合すると、「思ひ知る」における構成

要素間の意味関係は「一致関係」であると考ええる。「あれこれ考えて、これこれだ

と理解する」という意味で、一見「並立関係」にも見えるが、前述したように、

接続助詞「て」「つつ」を介在させた例や、構成要素の結合順が転倒した例が見られないこと、そして、思考のプロセスを経て、それを下敷きに判断する、ということであるので、単なる「並立関係」ではなく、構成要素の意味が融合した「一致関係」であると考ええる。辞書の記述や先学の研究とは異なる結論となったが、これはもちろん「思ひ知る」に関しての結論であって、ほかの「思ふ」を前項とする複合動詞については、個別の検討を要する。

四、まとめ

本稿では、「源氏物語」に用いられる「思ひ知る」について、その意味用法を検討し、それをふまえて構成要素間の意味関係を明らかにした。意味用法の検討では、自発の助動詞が下接する用例が多いこと、漠然とした抽象的な目的語をとること、下位者から上位者に対してはほとんど用いられないこと、単独「知る」と比較して目前の相手に直接用いやすいこと、といったことがらを明らかにし、「あれこれ考えたことをふまえ、これこれだと理解する」という意味であることを述べた。また、構成要素の意味関係は、「一致関係」であることを主張した。

今後の課題は多い。「知る」以外の心理動作を表す動詞に「思ふ」が付いた複合動詞について検討し、構成要素間の意味関係がどのようなものであるかを解明しなければならぬ。また、「心理」には「論理」的なものと「情緒」的なものがあると思われるが、「思ふ」を含む複合動詞にそのような区別が認められるか否か、興味深いところである(具体動作を表す動詞の場合は「情緒」的になるものが多いように感じられる)。少数ながら認められる「思ふ」を後項にもつ複合動詞についても検討の必要を感じている。

(注)

一、本稿でいう「複合動詞」とは、「動詞連用形に動詞が下接し、構文上一語をなすもの」を指

す。ここでいう「動詞」には、意味論および語彙史的立場から、接辞化したものや補助動詞化したものも含める。また、構成要素間に係助詞・副助詞・敬語の補助動詞等が介在したのも、複合動詞としてとらえる。

二、文献⑩所収の別表による。これには三語以上からなる複合動詞も含む。以下、本稿における複合動詞の数値は同書および筆者が所有する同書の基礎データによる。

三、ちなみに、「思す」「思ほす」を前項にもつ複合動詞はそれぞれ一六九語、四二語ある。また、これらを構成要素にもつ複合動詞はそれぞれ四二四語、七四語ある。

四、「思ふ」の敬語形である「思す」「思ほす」については、敬語の問題がからむため、本稿ではいったん切り離し、「思ひ知る」を中心に検討するが、おおまかな論旨は「思す」「思ほす」にも当てはまると考える。

五、使用テキストは岩波新日本古典文学大系。用例の引用も同書による。用例の検索には別巻の『源氏物語索引』を用いた。

六、このほか、副助詞「だに」が介在する例が「思し知る」に一例見られる。

七、係助詞の介在については文献⑩を参照。

八、文献④(八一人言)では、構成要素の結合順が転倒する例の有無が、複合動詞の認定に重要な根拠となることが検討されている。

九、心・こと・心・心ざしの程・心の程・心ばへ・ものの心・心ざま・心のうち・下の心・心の底。

一〇、世・世の中・世の有様・世の中の有様・憂き世。

一一、下位者から上位者への会話などで、話題に出てくる第三者に対して用いられる例はいくつか見られる。また、下位者の心中が述べられる場面で、上位者に対して用いている例も若干ある。

一二、このほか、文献⑫に、文献④とはことなる観点からの意味関係が考えられており興味深い。が、本稿ではとらえない。

一三、このうち⑥の意味は、ほかの辞書では「しる(領)」として項目が立てられているもので

ある。

(参考文献)

- ①佐久間博子(一九六五)源氏物語の複合動詞―「思ふ」を含むものについて―『国文学攷』第二七号
- ②中村幸弘(一九六九)万葉集の「思ひ」型複合動詞について(國學院大学国語研究会『国語研究』第二八号)
- ③竹村佳代子(一九七六)源氏物語における「おほしいそぐ」・「いそぐ」について『高知女子大國文』第一〇号
- ④関一雄(一九七九)中古中世の複合動詞、複合動詞の変遷(『国語複合動詞の研究』笠間書院・第一章第二節、第四節に所収)※初出は『国語学』第三輯(一九五八)、『国語と国文学』第三七卷第二号(一九六〇)。
- ⑤安光裕子(一九七九)複合動詞「思ひ₁」―人間思考の探究―『山口女子大國文』創刊号
- ⑥竹内美智子(一九八六)源氏物語の複合動詞(『平安時代和文の研究』明治書院・第四章「語と表現形成」に所収)※初出は『国文学』(学燈社)一九七二年二月、一九七七年一月。
- ⑦山田みどり(一九八六)複合動詞の語釈決定に関する一方法―「思ひ定む」の場合―(山田忠雄編『国語史学の為』第三部)笠間書院に所収)
- ⑧関一雄(一九八七)複合動詞―平安仮名文学用語として―(山口明德編『国文法講座 2 古典解釈と文法』明治書院に所収)
- ⑨関一雄(一九九三)女流文学の言葉(『平安時代和文語の研究』笠間書院・序「物語の言葉」第二章に所収)※初出は『日本語学』(明治書院)第四卷第二号(一九八五)
- ⑩東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明(二〇〇三)『平安時代複合動詞索引』(清文堂)
- ⑪岡野幸夫(一九九八)複合動詞の構成要素間に介在する係助詞の意味機能―『源氏物語』を對象として―『山口国文』第二号
- ⑫秋本守英(一九九六)仮名文章における語構成と文構成(『仮名文章表現史の研究』思文閣出版・第四章「仮名文章体の形成要素」の二に所収)※初出は『王朝』第一冊。

⑬ 宮田和一郎（一九六〇）源氏物語における敬語 『国文学』五卷二号・学燈社

⑭ 中村幸弘（一九六九）源氏物語中の「思ひ」 刑複合動詞研究ノ一ト 『國學院高等学校紀要』

第一一輯